9　わが母の信仰

わが子を出家さす

山口県の東端、錦帯橋で有名な岩国市の海岸、佐久間艇長の記念碑の建てられてある寒村に、私の母は生まれた。浄土真宗の凝り固まりの地方だけに、母は、幼少の時から熱烈な信者となり、一生をみ仏に捧げるために尼僧になると両親に願い出たほどだったという。けれども、その頃は西本願寺に女教師の制度もなく、女が布教して歩くわけにもいかないから、自分の子供に自分の信念を布教してもらったらよいではないかと諭されて、次男の私を僧侶にしようと念願しつつ、読経と「修身・人の道」を読むのを日課の一に加え、毎日「この子坊さん、この子坊さん」とお腹をさすってお念仏していた。

雪の夜のこと

私の幼少の頃、母が震えながら寝間に入ってきた。「お母さん、家の中に雪が降り込んだのですか」と尋ねると、

「眼が覚めたかい。お話をしてあげよう。ただ今は親鸞聖人さまの御正忌報恩講でお説教があるが、お父さんはハワイに行かれて留守、あなたと兄さんを留守番にお参りして、炬燵から火事でも出せば村の人々に申し訳がない。かといって、祖師の御恩

を思えば、炬燵の中でぬくぬくと寝ておられないから、裏の畑の雪の中で合掌し、お念仏を称えてきたのですよ。あなたも大きくなったら信仰の厚い本当の坊さんになってくださいよ。そして真宗の発展に全力を注いでください」

と語る母だった。母は各寺でお説教が勤まるときはいつも参詣していた。私は炬燵の櫓に登って説教の真似をすると「よく覚えているね」と讃められるので嬉しくて、私も熱心に参詣していた。父方の親類の主人が二人「今日はあなたに意見しに来た」と言って母を訪ねてきたことがある。母は「何か私に落度があったのでしょうか」と尋ねると親類の二人は、

「いつ遅ってみても下の戸を締めて寺参りをしている。子供が学校から帰っても温かい物も食べさされない、用事があっても話もできない、そんなに寺参りばかりしているのならハワイの主人に手紙を出して離縁する」

という。だが母はそれに答えて、

「ありがとうございます。私が色狂いするとかいうのなら是非もないが、寺参りを停めていただいては困ります、子供の知恵は毎日延びますが、大人の知恵はついて行けないから、私は仏さまの知恵を借りて子供を育てようとしているのです。お説教のないときは家でお裁縫をしていますから外から声を掛けてください。女一人ですから、押し売りなどが来ると困るので入口の戸は締めているのです。子供の教育は、食べさしたり、着せたりするだけが親の責任ではありません。永遠に生きる心の導きをするのが親の役目でなければなりません」

と、譬を挙げて説教を聞かしてあげたら、二人とも感心して帰っていったが、二十年後にはその二軒とも放蕩息子のために破産した。

夜になると毎晩、伯父の家に私たち兄弟を連れて「四書」の講義を聞きにいかれる母だったが、「お前は覚えがよいから」と私を調子に乗せては読まされる。「徳孤ならず必ず隣あり」とか、「一人貪隷なれば一国乱をなす」とか、鵜呑みにするだけだか

ら味はない。母はそれを仮名でいちいち書き上げては喜び実行に移すのである。

隣村に親孝行な車夫がいた。私は毎月一回くらいは呼びに行くお使いをさされていたが、その車夫に母は言っていた。「あなたは親孝行な感心な人だ、必ずあなたの子供が立派に出世して、あなたを喜ばし孝行してくれるから、親を大切にしてあげなさいよ」と言っては、お米や着物を恵んであげていた。今その子供は市会議員になって、親孝行をしている。

また親類から見捨てられた肺病の女性を自分の家の前の小屋に住まわして、一切の世話をしてあげていた。私も食事のお使いによく行かされたものだ。その女の人がいよいよ臨終になったとき、「親族の誰もが見向きもしないのに、奥さまは自分の子のように可愛がってくださった、このご恩は死んでも忘れません」と言って、母を拝んでいた。その姿を見ると、お化けのようで恐ろしく、私は飛んで帰ったことを覚えている。

母と子の問答

母が毎日毎日眼を泣き腫らしている。「なぜ泣くのか」と尋ねると、「子供は聞かないで遊んでおいで」と言われるので、私は「笑ったら遊びに出る」というと、苦しいなかから笑って見せられた。ご飯も食べられないので、家の中は御通夜のような悲痛な日が幾日もつづいた。夜明けごろ兄が「行ってはいけない、行ってはいけない」と大声で泣いているので、寝坊助の私も理由はわからないけれども、一大事と直感したから、片袖を握って同じように泣いた。母は初めてハワイにいる父が、弟の借金の保証をして、貸し主が日本に帰って返金を迫り、訴訟すると威嚇するので夜逃げを決意し、兄にだけ告げて出ようとされたから泣いているのだと理由がわかった。どんな苦労でもするから私たち三人は別れまいと約束し、翌朝三時ごろ岩国駅に出た。

汽車を待っている間に、母が「あの箱は何か知っている？」と聞く。「慈善箱」と答える。するとまた「あれはどうするの」と問われた。「孤児院にいる人たちに恵ん

で入れてあげる箱」と答えると、また「孤児院というのは何？」とつづけて問われた。私は「それはお母さん、両親のない子供が不良にならぬように一緒に入れて育ててあげるところでしょう」と答えると、「あなたは今、親と一緒におれるから幸福でしょう、お銭を恵んであげなさい」と、うながされた。「いくら入れようか」とたずねると、「兄さんは三銭ずつ、あなたは二銭ずつ入れてあげなさい」と、自分たちは夜逃げしながら布施の行を教えてくださった。全財産一円足らずのなかから十銭奮発した。

東京の藤岡勝二博士の住所を尋ねに広島の叔父の寺に行くと「東京は女子供の行くところではない」と、そこの老母から叱られ、岩国から迎えに来られた人に連れられて、私たちは引き返し、親族の者に解決してもらって、三人は仏前に合掌した。母はしんみり語るのだった。

「御先祖さま、申し訳ありません。私が不徳のために、皆さんにご心配をかけました。正木守吉さんは親切に貸してくださったのに、期限に返済しないのは私方が悪いのですから怨みも呪いもありません。前生で私が虐めていたのでしょう。これからは子供を立派に育てますからご安心くださいませ」と拝んでおいて、こんどは私たち二人の方に向き直って「あなたたちも苦しかったでしょう」と。そこで兄よりもおしゃべりの私が、「うん苦しかったよ、どうして仇討ちをするの？」いま怨みも呪いもないと言いながら、仇討ちとはどんな訳かと思いつつ〈千円ぐらい儲けて俺も金持ちになったぞと威張ってやる、（ふーん）しまった、一万円ぐらいと言えばよかった〉と考えたりした。母は兄に向かって「兄さんはどうする」と問われた。兄も「お金で苦しめられたのだから、うんとお銭を儲ける」というと「儲けたお金はどうするの」と母は聞かれたのに対し、兄は「困った人を助けてあげる」と答えると「それはよい考えです、金持になっても贅沢する金持は永続きがしません」と言われた。

こんどは私の方に向いて、「あなたは坊さんになるのでしょう、坊さんが金もうけし

てはいけません」というので、私は「でも、お金で困ったのではないか」と反問すると、「坊さんは、お金がなくても困らない方法が一つあるのです。信仰の光に向かって進めば影法師の物質はいくらでもついてくるのです。物質の闇を狙って進めば、破滅のどん底に沈むのです」と言われる。私はまた問い返した。「もしか、間違ったらどうするか」と言ったら、「道心のうちに衣食ありと申して、仏さまの仰せには絶対間違いはない。間違って物質に困ることがあったら、あなたの信仰が間違っているのです」と教えてくれた。「それならお母さん、私が坊さんになって布教するところに何処にでも連れていってあげるよ」というと、母は「まあ嬉しい」と大喜びしていると、側から兄が「言うだけなら俺でも言う」と口をはさんだ。

すると母は「言うだけで結構です。子供のときに言ったことは、大人になって必ず実行のできるものです」、と私を応援してくれた。

こころの親をさがせ

私が広島の第四仏教中学に入学したとき、「一人の僧侶を作るために、私もハワイに行って学資を送りましょう」と母が言い出した。私はそれでは困ると思って「父が行き、兄が行き、母に行かれたら、私一人が日本に残るので淋しいではないか」と言ったら、「祖師でも蓮師でも肉体の親に早く別れられたから、心の親を探し求められ、偉大な宗教家になられたのです。あなたは十年一緒にいた後、永久に離れるのと、十年離れていた後、永久に別れないのとどちらがよいか」と問われた。「それは十年離れていても、後に永久に別れない方がよい」というと「そうでしょう、いま別れが辛いからとて一緒にいても、妻をもらえば親は邪魔になるのです。いま別れて淋しくても、心の親に逢えば肉体の親の御恩もわかり、生々世々親子の因縁を結んで衆生済度ができるのですから、信仰に生きることが永遠に別れないことになるのです」と語り聞かせてくれた母だった。

来る手紙も、来る手紙も、信仰の話の書いてないときがない。大正七年ごろスペイ

ン風邪が流行したとき、「おかげさまで私方は流行を追わないから流行性感冒も入らないらしいです」と言い、「布施ということは慈悲、親切ということだそうです。人と物とに親切にしましょう、物を粗末にする者は、物から嫌われるから貧乏するのです。私のミシンの一針一針には、お念仏さまが働いていてくださるのです。どんな苦労をしても仏さまと一緒なら、にっこり微笑まれます」とも書かれてあった。またあるときは「豚の食物を集めに来る人が、私の家の塵箱には食物の屑が全然ないと言います。魚の骨でも草木の根に埋めてやれば美しい花を咲かしてご恩返しをしてくれます。僧侶は人さまの真心を頂くのですから『信施を粗末にすれば、化して銅汁鉄丸となる』という話を聞きましたが、責苦が大きくなりますから、物を粗末にしてはなりませんよ」とも書かれていた。

母の最後の教訓

私は昭和十四年、ハワイに両親を迎えに行った。母は常に自分の幸福を喜んでいた。そしてこう言うのだった。「兄さんとあなたとは、いつも競争している。一人は物質界に、一人は精神界に、私の思う通りの子供ができて孝行してくださるから、私は地上における幸福者であることが有り難い。しかし時代ということを考えねばならないと気がついたのは、あなたの幼いときから親鸞聖人さまのように黒の法衣に黒の袈裟、草鞋掛けで教化してくださいと言っていたが、自動車、飛行機、ラジオ、テレビの時代に七百年前の姿では誰も相手にしないでしょう。いま聖人さまが出現してあるとすれば、飛行機で活動され、ラジオやテレビで放送されるに違いないと思います。水は下から上には流れない、どん底の生活をしていては、人が信用しません。あなたも登れるだけ登りなさい、そして聖人の心を心として布教してください。光に向かって進むものは栄え、闇に向かって走るものは滅ぶ。今度はあなたの子供として産れてきましょう」

と言って、二カ月後の昭和二十三年八月十四日、七十七歳を一期に念仏しながら静

かにみ親の側に帰って行った。

姉の語る母の日常

ハワイの兄たち夫婦が帰ってきて母の一周忌の法要を営み、姉がしみじみ物語っていた。「いまだかつてお母さんの不平や愚痴を聞いたことがなかった。店から住居の方に帰ってくると、お疲れでしたろうと笑顔で迎えられ、お夕飯が終わったら、さあ肩を揉んであげましょうと言われるのです。勿体ない、私が揉んであげますよと言いますと、いいえ、年寄が揉むと全身の運動になるそうですから揉ましてください。その代わり、この本を読んで聞かしてくださいと言われますので、何の気なしにすらすら読んでいくと、大切なところは何回でも読ませて、その意味を問われる。信仰問題や育児の方法、賢母の十訓など説明すると、感心しては喜んで聞いてくださるのでした」

そのとき姉は母から気付かされたのだが、と言って言葉をつづけ「ああ、私は馬鹿でございました。お母さんより私の方が早く読めるから読ましてくださるのだと自惚れていたが、今になってようやく母の心がわかりました」と涙をぽろぽろ流している。

「よく見ると、大切なところには赤い線が引いてあるのです。この書物を読めと渡されたのでは、私が疲れたまま読まずに睡るから、肩を揉んで機嫌をとりつつ、ここが大切ですよ、これが人間生活には必要ですよ、これが宗教の要ですよと、昼間読んで、赤線を引いて繰り返させつつ注意して私を教育してくださっていたのだと、勿体なく泣けて泣けてなりません」と述懐していた。

母はわが善知識だった

母逝って三十年、母は善知識であった。私一人を救済するために本師の彌陀は母となり、この難化の私を誘引し、難治の私を開化して、無上甚深微妙の法を廻向して大信海に帰せしめ給うた無限絶大の鴻恩を感謝せずにはいられない。感謝の言葉も南無

阿彌陀仏、懺悔の言葉も南無阿彌陀仏、仏徳を讃嘆するままが祖徳を讃仰することであり、祖師の深意を開示するままが母の信念を宣布することである。母の意志を発表するままが響流十方、大音宣布の妙法となるのである。吾は母と倶に在り、母と倶に喜び、母と倶に仏恩を讃仰さしていただいている。

母の法名を記してこの稿の筆を擱くことにしよう。

昭和二十三年八月十四日没　慈照院釈法海大姉　俗名　村岡美和　七十七歳